

総務課 NEWS

第54回通常総会が開催される

当協会の平成15年度の事業報告並びに収支計算書等を承認する第54回通常総会が平成16年5月27日に新潟市「ホテル新潟」を会場に開催され、本人出席26名、委任状出席114名でありました。総会は柳澤会長の挨拶に始まり、来賓の県農林水産部副部長・山下芳実氏より祝辞をいただきました。

柳澤会長の挨拶では、BSE、鳥インフルエンザの発生など、家畜に関連する事柄が国民生活に係わる大きな社会問題となり、消費者から安全・安心がしっかり確保された畜産物の安定供給が求められている。また、本年11月からは家畜排せつ物の適正管理が義務付けられ不適正処理の解消と併せて耕種部門との連携による資源循環型農業の構築が求められている。このような情勢の中で畜産経営の体質強化や家畜・畜産物の価格安定対策、安全性確保対策等、生産から消費に至るまでの総合的な事業を展開する等挨拶を行いました。続いて、平成15年度の事業報告書、収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表及び財産目録の承認について、役員改選について、附帯決議の3つの議案を審議し、いずれの議案も原案通り承認されました。

また、総会後に開催された第2回理事会において、会長、副会長、専務理事の互選が行われ、会長に柳澤武治氏、副会長・樋山彗男氏、専務理事・帷子功氏が選任されました。

支援業務課 NEWS

「にいがた和牛推進協議会」 総会が開催される

県産和牛のブランド統一による生産拡大と販売促進を図るため、生産から流通に至る関係者を会員とする「にいがた和牛推進協議会」が昨年9月に設立され、活動を開始しました。平成15年度は年度途中からの活動と言うこともありましたが、新潟並びに東京会場において平山会長（県知事）の出席を得て「にいがた和牛」の披露会等を開催し、食肉流通関係者や生産者、消費者の方々に広くPRに努めました。

本年度はメディアを活用しての積極的な販売促進活動や消費者交流会を通して「にいがた和牛」の一層の理解と「地産・地消」を進めると共に、生産振興対策として和牛肥育農家の諸技術の高位平準化を図る「にいがた和牛肥育名人の認定」等の事業計画が承認されました。

1 販売促進対策事業

(1) 東京食肉市場出荷対策

- ① 新潟産和牛の上場予定表送付
- ② 「にいがた和牛」枝肉検印の押印依頼

(2) 販売促進対策

- ① 産地証明書・シールの発行
- ② にいがた和牛取扱指定店の登録
- ③ 販売促進資材の作成と提供

(3) 消費拡大対策

- ① ホームページの掲載
- ② にいがた和牛取扱指定店ガイドの作成
- ③ 消費者交流会の開催
- ④ にいがた和牛のPRコーナーの設置
- ⑤ 広域的宣伝の実施

2 生産振興対策事業

(1) 生産振興対策

- ① 枝肉共励会等の支援
- ② にいがた和牛肥育名人塾の開講



にいがた和牛推進協議会の総会

平成15年度 経営診断結果の概要

本協会では実施している畜産経営技術高度化推進事業の平成15年度経営診断結果がまとまりました。畜種別の概要は以下の通りです。

(酪農経営)

平成15年度の診断事例(16戸)における経産牛1頭当たり年間乳量の平均は8,040kg(14年:8,351kg)となり、平成8年以降8,000kg以上で推移しているものの、前年実績に比べ乳量の低下した事例が多く見られた。乳房炎や周産期疾患による泌乳最盛期での処分牛の増加、生殖器疾患を原因とした分娩頭数の減少、後継牛不足による更新時期の遅れ等が乳量低下の大きな原因となり、経産牛処分率は30.5%と非常に高くなった。特に、生乳中の体細胞数は469千個と著しく増加し、経産牛処分理由のトップが乳房炎となっているので、基本的な乳房炎対策の徹底、衛生管理意識の向上が課題となっている。一方、経営面では生乳販売収入が前年を下回ったことに加え、飼料自給率の低下や購入飼料の値上がりにより乳飼比が大幅にアップしたことから、経産牛1頭当たり所得は156千円と近年では最低となった。

区分	単位	H12	H13	H14	H15
経産牛1頭当たり産乳量	kg	8,318	8,174	8,351	8,040
経産牛処分率	%	27.5	21.4	25.3	30.5
体細胞数	千個	280	272	350	469
経産牛平均分娩間隔	月	15.3	15.4	15.5	15.8
乳飼比 (経産牛当たり)	%	40.7	42.0	43.7	47.3
経産牛1頭当たり所得	千円	198	187	184	156

(肉用牛経営)

平成15年度は、乳用種肥育以外はBSE発生の影響も少なくなり、枝肉価格はほぼ回復した。この結果、一層肉質の高い和牛肥育に移行する傾向が見られて、素牛不足から和牛子牛は最近にない高い価格で推移して来ている。生産技術はここ数年大きな変化は見られず生産技術向上努力が求められる。

1 繁殖経営

収入の内容は異なるものの収入額については前年と比べ45千円多く、費用も22千円多くなった。

和牛繁殖経営の収入構成 (単位:千円)

繁殖牛1頭当たり	H12	H13	H14	H15
販売収入	378	370	352	420
事業外収入	49	53	74	51
合計	427	423	426	471
自家労賃控除総費用	332	339	324	346

2 肥育経営

収入について、和牛は枝肉価格の回復から助成金等の減少で事業外収入は減少したが、販売収入が大幅に増加したことから収入合計も増加した。乳・交雑種は枝肉価格の回復が遅れきびしい内容であった。

肥育経営の収入構成 (単位:千円)

肥育牛1頭当たり		H12	H13	H14	H15
和牛肥育経営	販売収入	841	748	684	880
	事業外収入	71	109	142	38
	合計	912	857	826	918
	自家労賃控除総費用	844	828	837	840
乳・交雑種肥育経営	販売収入	393	455	323	384
	事業外収入	46	43	149	37
	合計	439	498	472	421
	自家労賃控除総費用	342	431	417	432

注) 乳・交雑種肥育経営のH12は乳用種肥育牛の比率が高かった。

(養豚経営)

平成15年度の養豚経営は、BSEの代替需要等による高値相場も収まったため、前年を大きく下回って推移していた。特に、7月以降の高値になるべき時期でも相場は上がらず、非常に苦しい状況となっていた。そのため、コンサルでの枝肉販売単価・年平均は400円/kgと前年より63円も安くなっていた。飼養管理成績の繁殖部門では、年間離乳豚頭数が21.8頭と前年に比べ1.0頭減少し、肥育部門では事故率が6.4%と若干悪化していた。

今後は相場が高いときはもちろん、低いときにこそ、より一層の飼養管理技術の向上に取り組み、所得の確保に努めて頂きたい。

区分	単位	H12	H13	H14	H15
年間換算離乳豚頭数	頭	21.4	21.8	22.8	21.8
肉豚事故率	%	5.5	6.2	5.9	6.4
枝肉1kg当たり総原価	円	407	414	402	412
種豚(♀)1頭当たり所得	千円	95	175	177	70